〔書評・文献紹介〕

Meister Eckhart, eds. by L. Sturlese/M. Vinzent
The German Works: 64 Homilies for the Liturgical Year. 1. De tempore
Leuven: Peeters, 2019, pp. XX+872, ISBN9789042936089

Meister Eckhart, eds. by L. Sturlese/M. Vinzent
The German Works: 56 Homilies for the Liturgical Year. 2. De sanctis
Leuven: Peeters, 2020, pp. XVIII+760, ISBN9789042939325

阿 部　善 彦

ここに紹介する文献は，マイスター・エックハルトのドイツ語説教集の独英対訳版である。その特徴はタイトルにあるようにカトリック教会の典礼暦に沿って説教を配列していることであり，そこに本文献の挑戦的な意義があると言っても過言ではない。どういうことか。

常識的に考えれば，中世の修道者の説教であればミサのなかでなされたものであって，それはそのミサで読み上げられる聖書個所と連動したものであると容易に想定されるのであるから，それをいまさら，典礼暦に沿って配列したことに挑戦的な意義があるとわたしが力を込めても，首をかしげる人も多いだろう。ここにはエックハルト研究独自の問題がある。

個人的な話を絡めるが，21 世紀に入って，ちょうどわたしが博士論文に取り組み始める頃，ここに紹介する文献が誕生するに至る重要な研究と問題提起がかなり活発になされるようになっていた。それまでは，エックハルトと言えば神秘主義，という歴史的コンテキストを完全に無視した時代錯誤の固定観念がはびこっていたが，そうした幻想的な〈エックハルト像〉を歴史資料にもとづいて塗り替える研究が 1990 年代以降に目立つようになる。簡潔に言えば，エックハルト自身の自己理解がそうであったように，ドミニコ会（説教者兄弟会）の修道者，説教者としてエックハルトをとらえ直す，歴史資料にもとづく研究と議論が大きく進展した。日本の西谷啓治や上田閑照らのエックハルト研究は，比較的早くから，修道者，説教者としてのエックハルトに注目していたとも言えるが，当時の

カトリック教会の歴史的状況を理解するよりも，そこからかけ離れた自分たちに身近な宗教者のイメージや理想像（僧や坊主という言葉を用いている）を直観的に投影・適用していた感は否めない。

ということで，わたしは博論に取り組むに際して，同時期に加速化した〈エックハルト像〉を徹底的に糺す先行研究に大いに学び，ドミニコ会（説教者兄弟会）の修道理念や養成・学問研究の諸制度にかんする歴史的・文献的研究成果にもとづいて刷新・更新された〈エックハルト像〉を捉え直す先行研究を追いかけた。振り返ると，わたしの博論やその前後の論文はほとんどエックハルト像を糺すことを追求していたと言え，脚注も参照文献の情報が満載であるのだが，そこには，〈ドイツ語説教の資料問題〉にかんする先行研究からの影響もかなりある。これもここで紹介する文献の誕生に決定的にかかわるので少し述べたい。

先に触れたが，説教の性格上，ミサなどの聖務のシークエンスで具体的に期待される役割，そしてそのカレンダー上の配置がその説教固有の成立状況となり，内容を規定・制約することが多い。実際，エックハルトの弟子筋のヨハネス・タウラーの説教集は典礼暦に沿って配列・編纂されたものが流布している。これは当時の慣例に倣うものであり，説教者がその職責を果たすために利用・参照できる模範説教集成が典礼暦に沿って配列・編纂されていた。

また，説教者自身が自分用に自分の説教を集成しておくこともある。いずれの説教集成も一般に「範典」（Exemplar）と呼ばれることが多いが，エックハルトのドイツ語説教にはそうした「範典」がない（彼自身のもとに存在していたはずであるが，いまだ現存が確認されていない）ため，エックハルトによる説教とただちに確定できないものが相当ある。そのため，現代のエックハルト研究は，膨大な写本に拡散している彼に帰せられる説教（断片も相当ある）を収集し，かつ，その真正性を判定する骨の折れる作業を積み上げる必要があった。

その成果がコールハンマー社版『エックハルト　ドイツ語著作集』（全五巻）のうちの最初の四巻，つまり，『ドイツ語著作集　第一巻』（DW I: 1958 年 : ドイツ語説教 1–24 を収録），『同第二巻』（DW II: 1971 年 : ドイツ語説教 25–59 を収録），『同第三巻』（DW III: 1976 年 : ドイツ語説教 60–86），『同第四巻』（DW IV: 2023 年，ただし第二部まで : ドイツ語説教 87–117）であり，『同第四巻』を締めくくる第三部は 2024 年中には刊行されるようである。1936 年に最初の分冊が公刊されてから 90 年近い月日が流れているが，それは先に触れたように，膨大な写本のなかに散らばる説教の収集・整理に加えて，説教のオリジナル性，真正性の判定が困難なケースが大量にあったからである。

そのため，この全集版の編者である Josef Quint は独自の判定基準群を確立し，より多くの判定基準で真正性が確保された説教から順に各巻に配列した。したがって，第四巻（DW IV）にゆくほど真正性の判定が難しい説教がのこる。1976

年に J. Quint が死去したあと，この事業は Georg Steer に引き継がれ，1990 年代から 2000 年代にかけて第四巻が分冊で徐々に公刊されるが，新たに利用可能となった写本が増加して編集作業も増大した。

こうした事情もあって第三巻と第四巻の公刊時期はかなり離れており，完結までも相当の時間を要したと言えるが，その間にも，Steer や Freimut Löser らによって〈ドイツ語説教の資料問題〉をめぐる刺激的な研究がなされ，多くのエックハルト研究者が議論に参加しながら，第四巻の完結を待ちつづけた。ここで紹介する文献は〈エックハルト像〉と〈ドイツ語説教の資料問題〉をめぐるこれらの研究状況に連動して，〈説教者兄弟会の説教者・修道者エックハルト〉とその説教活動の成果である「ドイツ語説教」全体を新たに提示する試みであり，以上の詳しい次第はここで紹介する文献の第一巻のイントロダクションでも示されているので是非読んでいただきたい（特に 14–20 頁）。

コールハンマー社版の「ドイツ語説教」が，当初，全 128 説教と予告されていたところ，全 117 説教として今まさに完結しようとしているが，本文献は，第四巻（DW IV）収録の「ドイツ語説教 113」（真正性要検討），「同 114」（説教ではなく論考），「同 117」（真正性要検討）を除くすべてを収録している。ただし，その数は説教番号としては 1–119 であり，総数としては 120（第一巻 64，第二巻 54）となっている。これはコールハンマー社版でたとえば「ドイツ語説教 54a」「同 b」とされていたものが，本文献ではそれぞれ「同 43」「同 44」のようにカウントされているほか，本文献でも「同 65」「同 65a」があるためである。なお，本文献とコールハンマー社版との説教番号の対照表は第二巻（753 頁以下）にある。

本文献は，基本的にコールハンマー社版に準拠した中世ドイツ語テキストを用いているが，各説教が新しい研究にもとづいて再検討されて，異なる読みをとる場合もある。いずれにせよ，コールハンマー社版と決定的に異なるのが説教の配列である。コールハンマー社版は先に述べた理由で「ドイツ語説教」は真正性の判定にしたがって配列されており，エックハルト自身が行った，あるいは，構想したであろう順序によるものではない。

その問題性は以前から指摘されてはいたものの，そもそも真正性の判定すら困難であったため，典礼暦にもとづく「ドイツ語説教」の再構成の重要な試みを最初に示したのは，コールハンマー社版の第三巻（DW III）の公刊から少し後に出た，Joachim Theisen の *Predigt und Gottesdienst: Liturgische Strukturen in den Predigten Meister Eckharts*, Frankfurt a. M./Bern 1990 であった。この研究は画期的な労作であり，ここで紹介する文献の第一巻のイントロダクションでも重要な先行文献として繰り返し参照されているが，わたしすらも胸熱くなり，それに学んでエックハルトの「ドイツ語説教」のスケジュールについて検証を加えた論

文を試みたことがあるほどインパクトのあるものだった。その拙論は「共生学的展望へのエチュード：その言葉がひらきむすぶものに向けて」『共生学』（1），2009 年，81–115 頁，であるが，ただし反響は乏しかった。とはいえ，その際に，典礼暦にもとづく「ドイツ語説教」の再構成は思った以上に難しく，Theisen の研究にも未確定なところが多く残されていることがよく分かり，以来，これに続く優れた研究を待ち望むようになった。

Theisen の研究から 30 数年たち，コールハンマー社版第四巻（DW IV）の全貌が明らかになってきた頃に，数多くのエックハルト研究を手がけてきた Loris Sturlese と Markus Vinzent によってついにこの文献が世に出されたが，それでも，これがオリジナルの「範典」を復元した確定版ではなく，研究者たちのさらなる議論を求めるものであることが第一巻のイントロダクション（61–62 頁）でも強調されている。実際，異なる配列の可能性については，第二巻のイントロダクション（12–13 頁）で Andreas Speer による異なる配列の提示について応答しており，これについては次も合わせて参照されたい。A. Speer, “»Edel sei der Mensch …« — Anthropologische und soteriologische Perspektiven in den Kölner Predigten Meister Eckharts”, in *Meister-Eckhart-Jahrbuch,* vol. 14, Stuttgart 2021, pp. 35–67. あわせて同年報に掲載されている，ドイツ説教の資料問題の専門家である，Freimut Löser による次の研究も参照されたい。“Welche deutschen Predigten hielt Meister Eckhart wann in Köln? Antwortversuche”, ibid., pp. 7–33.

本稿のはじめに，本文献の挑戦的意義が典礼暦に沿って説教を配列したことにあると述べたが，それはこうした事情による。また，実は，この文献には続巻が計画されており，それは第一巻のイントロダクション（14 頁）に記されているのだが，100 を超えるエックハルトのラテン語説教を同様のスタイルで編集し，それをもって，エックハルトのドイツ語・ラテン語双方の典礼暦に沿った説教集成を提示するものである。その進展を待ちたい。

本文献に先立って，編者のひとり Sturlese が独伊対訳版で典礼暦に沿った説教集成（64 の説教）を試みている。*Meister Eckhart: Le 64 prediche sul tempo liturgico,* Milan 2014. この独伊対訳版——各説教のはじめに解説があり，それに対訳テキストが続く——をモデルとして本文献は成立しているが，その内容は新たにされ，本文・注もコールハンマー社版にもとづきながらも最新研究によってあらためられ，英訳はそのつど原典から訳出されている。独伊対訳版との関係性は第一巻のイントロダクション（61–63 頁），参照される先行する英訳は同（2–4 頁）で言及されている。またエックハルトのドイツ語での思想表現には独特の言語用法や造語が含まれており，それを他の言語に適切に写し取ることはとても難しいため，英訳の方針と重要用語の独英対照表が同（64–66 頁）で示されている。

以上，わずかなりとも，この文献の妙味が伝われば幸いである。コールハン

マー社版でのドイツ説教も現代ドイツ語訳も含めて最近完成したが，情報量も膨大で大部である。他方，本文献はそれよりはコンパクトに用いることができる。そういう点でこれからのエックハルト研究の基本文献となるだろう。各説教の冒頭には内容と書誌情報，先行する英訳版の情報があり，最初に手がかりとなる情報を見つけることができる。原文と対訳には，それぞれ段落番号（コールハンマー社版のラテン語著作集では採用されている）が振られており，今後の論文での引用個所参照表記にも用いられるであろう。

最後に一言。こうして自分がかつて待ち望んだような文献を実際に手にすることができたのは幸運であったが，これほどの霊性的・思想的宝庫であるドイツ語説教集成が，エックハルト異端断罪後，長きにわたりわたしたちの世界から失われてきたという事実にあらためて直面し，胸が押しつぶされる気持ちになる。中世後期の教会人・神学者たちはエックハルトを攻撃・断罪するために振り上げたその自分たちの拳で，自らの信仰世界からエックハルトもろともドイツ語説教を忘却の闇に抹殺し，その後の西洋近代人もその欠損――それはまず近代以降の人間の自己理解を制約したであろう――をかえりみることはなかった。本文献およびコールハンマー社版第四巻（DW IV）の完結を機に，ドイツ語説教全訳も現実的な目標として見えてくるが，それに取り組む各研究者が担う使命は，人間が自ら進んで失ったものを，もう一度，人間のいのちのなかに取り戻すことにあるとも言える。